

令和3年度 第1回学都松本子ども読書活動推進委員会 議事録

日時：令和3年8月31日（火）14：00～15：30

場所：松本市中央図書館 第1視聴覚室

【出席者】

豊嶋委員長、上條副委員長、三ツ井委員、奥原委員、谷口委員、舟田委員、越高委員、清水委員

（事務局）小西中央図書館長、大月館長補佐、百瀬主査、大澤主任

【次第】

- 1 開会
- 2 館長あいさつ
- 3 自己紹介
- 4 委員長及び副委員長選出
- 5 委員長あいさつ
- 6 議題

【議事録】

- 1 「4 委員長及び副委員長選出」について  
委員長に豊嶋さおり委員を、副委員長に上條ひとみ委員を選出
- 2 「6 議題」について

【報告事項1 第2次学都松本子ども読書活動推進計画について】

事務局：説明

委員長：少し補足をします。子ども読書推進計画の概要版リーフレットをご覧ください。

まず、松本市では、ブックスタート事業が他の自治体に先駆けて平成13年に始まった。そこから随分経って、この第2次計画で、セカンドブック事業が令和元年度からスタートした。計画初年度にスタートしているところが素晴らしい。またセカンドブックとあわせてサードブックも計画され、画期的なことだと思った。サードブックは6歳ころ本をプレゼントする事業だが、継続的に子どもたちの読書活動を応援するという意味において大変重要なことで、こちらについては後ほど図書館から提案があると思うので、皆様からご意見をいただきたい。

また、初めてのパパママへの応援という事業があるが、ブックリストの配布等、取組みがすでに始まっている。

なお、ブックスタートについては、これまで図書館独自で本の選書を行っていた

が、我々委員や読書案内人と言われる子どもの本に通じている方々も加えて選書を行い、令和3年度から候補本5冊をリニューアルした。候補本とあわせて冊子もリニューアルし、冊子の選書等にも、我々の意見が反映されている。

また、中高生向けの働きかけについても取組みが始まっている。子ども読書推進計画は18歳までとなっているが、松本市では中高生への働きかけがこれまで弱いと様々な場所で言われてきた。昨年度、中高生向けの働きかけについても作業部会が開かれ、積極的に動きつつあることを報告する。読書案内人という民間の有識者が、この推進委員会を含め、図書館とともに子どもの読書活動を推進することができるという点も、第2次計画の画期的なところである。

また、令和元年度から、読み聞かせボランティア養成講座が始まり、ボランティア登録制度がスタートしており、あわせてボランティア活動の経験を積んだ方で、スキルアップ講座を受講することにより、図書館職員に準ずる形で、有償で活動することができる子ども読書推進サポーターというものも設置された。この方たちは現在ブックスタート事業で、コロナの感染対策に気をつけながら、図書館職員とともに活躍している。これらの事業を進めるための委員会が設置され、ともに協力しながら、事業や活動を進めている。

## 【報告事項2 令和3年度第1回作業部会の報告】

事務局：説明

委員長：サードブックについては、先ほど申し上げたとおり、6歳ころに本を届けることになっている。セカンドブックまでは、健診時に1人1冊プレゼントするという方式をとっていたが、サードブックについては、学級文庫に複数冊設置して、1年間を通して1年生全員が35冊に触れられるという案を図書館が提案した。この案について、昨年度来、この委員会でも協議を重ねた。そして、今年度6月に、学校の先生、学校司書の先生方なども交えて、作業部会で協議した。サードブックを事業化するにあたり、図書館の方で動きがあるようなので、作業部会の内容も踏まえ、次の協議事項1で協議したい。

【協議事項1 サードブック事業の実施方法について】

事務局：説明

委員長：冒頭に説明があったとおり、実は昨年度の段階では、来年度、令和4年度スタートを目指していたが、それが現状厳しくなった。もう少しサードブック事業の概要や運用について、実現可能な方法に改めるべしというのが、現状市の考え方のようなので、皆様から意見をもらいながら、令和5年度スタートに向けてこの1年かけて協議を重ねていくということだと理解しているが良いか。

学級文庫方式が、現時点で絶対無理とは言い切れないので、より良い運用方法や、公平性がきちんと担保されるようなやり方ができれば、実現できるかもしれない。

また、どうしても学級文庫方式が難しいと市の方で判断された場合には、別案として、1人1冊プレゼント方式も考えていくということで良いか。補足等あれば、館長にお願いしたい。

館長：行政的なことを言って申し訳ないが、予算については、実施計画というもので、この事業を進めていくにはどのような計画で上げていくのが良いかを財政課と総合戦略室というところが見ていく。サードブックについて、昨年度計画に上げた段階では、ICT化などの環境変化を意識して進めるように指摘があったが、子どもたちに本を手にとってほしいという思いが強いので、今年度学級文庫方式で進めてきた。

しかし、35冊配って、進級時この35冊をどうするかというところで詰まってしまった。安曇・奈川については、来年度1年生がいないという状況になっている。1人2人の少人数クラスについてどうするか考え、実施計画を変えてみたが、相手方を納得させることができなかった。

作業部会の際、小規模校は本の入れ替えをせずそのままにしたり、共有スペースに置いてはどうか、人数の多い学校では、1人1冊ずつ配ったらいんじゃないか等、たくさん良い意見もあったが明確な答えを出すことができなかった。

35冊をどうするかについて考えるよう指示があったため、実施計画を1人1冊方式に変えて上げてみようと思ったが、皆さんの意見を聞けば、もっと良いやり方が見つかるのではないかと思い、1年先延ばしして令和5年度スタートを目指すことにした。

委員長：館長の説明で納得いただけたかと思うが、現段階で学級文庫方式が実現不可となったわけではないが、より良い方法を探すために、もう1年かけて協議することになった。意見がある方はお願いしたい。

A委員：昨年度、学級文庫方式について聞いたときに、とても良いアイデアだと思った。来年度の各学校の1年生の数字を示してほしい。図書館の方から、メリット、デメリット等、課題をもう少し細かく示した上で、他の自治体の失敗例、成功例を

参考にして意見を出し合えば、これなら大丈夫という案が見つかるのではないか。

B委員：小規模校と不登校児の2点が課題だと思うが、小規模校というのはどこがあてはまるのか。1クラス30人いない学校は極端に少なく、奈川、安曇、大野川、四賀くらいではないか。4月からもう不登校の子は何人ぐらいいるのか。いないのではないか。図書館の方にはここで引き下がらないでほしい。逆に少人数の学校も大きいところと同じ環境にしてあげたいという思いでやり方を考えられないか。小さい学校が本を買えないと言って仕事をしていたので、公平性というのであれば、そういう形の公平性を加味してもらえないか。小規模校の児童は1人で寂しい思いをしているので、他の学校と同じように1人で35冊も読める環境があれば本当に嬉しいのではないか。

館長：予算的には資料にあるとおり、学級文庫方式と、1人1冊方式で100万ほど違う。原則35人学級であれば35冊でいいが、進級時にどうするかという点が課題。35人クラスで全員に配るとしても好みの本じゃなかったとか、図書館に入れるにしても全部入っている本ということもある。なかなか相手方を説得させるような方法が見つからなかった。

委員長：昨年度来、また作業部会の話の中でも、運用方法についていくつかの例が示された。しかし、先ほどA委員もおっしゃったとおり、具体的に例示されていないので、わかりにくいかもしれない。学校の実情に合わせた活用をしていくために、運用方法についてもっと具体的に例示すべきではないか。

それから予算に関して、単価1,980円の根拠は何か。高い本もあれば、安い本もあるということでこの金額に落ち着いたと思うが、予算を下げたいのであれば、1人1冊配布と同額もしくは多少出るくらいに抑えられるような選書を考えていけば、不可能ではないように思う。

B委員：35冊全ての学校で一律にせず、35人いる学級は35冊必要なので、何人から何人だと何冊のような考え方で2、3パターン考えてはどうか。

また、大規模校について作業部会で意見が出たが、例えば4クラスの学校にはA・Bの2セットにして、2セットあれば、年度の後半にクラス間で入れ替えて70冊読んでもらうことができる。A・B・Cの3セット用意するのは大変なので、AとBくらいにして、複数学級の場合は、3クラスならAを2つとBを1つ選んでもらうなど、丁寧な運用ができるとより良い。

昨年度の委員会や作業部会で、進級時に35冊をどうするかという意見が随分具体的に出ていたように思う。そういった意見をきちんとまとめてスタートすると良い。学級文庫方式がうまくいけば、松本のサードブックを広く発信して、うちの学校でもそうだったらいいなと思うようなものにできると思う。

C委員：学校司書として7年間働いていた時、ほぼ毎日クラスに出向いていた。サードブ

ックで学級文庫にブックセットを置くという話を聞いて、とても素敵な取り組みだと思った。学級文庫はどこの自治体でも悲惨な状態で、本が古く、扱いが雑で管理する者がいない。案を拝見して、この本にブックコートフィルムがかかっていたらいいなと思った。というのも、学級文庫に置くと管理することがないので、委員会等で2年経ったら子どもに配布するという案が出ていたが、恐らく破れてしまったり、壊れたり、あるいは紛失してしまうことがあるので難しいかもしれない。

サードブックの目的を拝見して、学校に置くのか、個人に手渡すのか、まずしっかり目的を定めておく必要があると思った。児童個人に配らなくても良いのであれば、やり方が異なってくると思う。

松本市では大体半年後から図書館利用がスタートするようだが、私が勤めていた自治体では、5月からのスタートで、担任から本を読ませたい等の声があれば大量に貸し出していた。サードブックについて1案だが、例えば、学校図書館にサードブック文庫としてプレゼントして、学校図書館の資料として登録した後、各学級に通年貸し出すという方法はどうか。学年集会などの時に、先生か、余裕があれば図書館職員が出向いて、サードブックの説明をしても良いと思う。また、学級文庫に複本はなくても良い。多様な本があった方が良いので、わずかな冊数に複本を含めてしまうのはもったいないと思う。

D委員：1人1冊配るメリットと、学級文庫に置くメリットは全く違うと思う。昨年話が出たのは、学級文庫重視の形だった。学校の規模は様々で、先ほどB委員がおっしゃったように、人数によってグループ分けしていけば、必要な冊数も減っていくと思う。1人1冊配るとしまい込んで終わりという子が多い。学校にあると、例えばテストが終わった後、時間があったら読んでいいよと言うと、子どもたちは本を喜んで読んでいます。この間児童センターにおじゃますると、子どもたちが取り合って本を読んでいた。毎年新しい本が来るという期待感は学級文庫ならではだと思ふ。ぜひ時間をかけて1つずつ進めていきたい。大人になると本ではなく、パソコンなど本以外で読む人が多いが、子どものときに紙の本を手にとらないと、やっぱり本に近づけないと思う。クリアしなければならない課題がたくさんあることは承知しているが、せつかく1年延ばしても良いということであれば、時間をかけてより良いサードブックにしていきたい。また、進級時に果たして本を配らなければならないのかという提案もあったので、しっかり考えていければ良いと思う。

E委員：1人1冊プレゼントされるのは嬉しいことだと思うが、広がりが無い。同じ予算を投入するならば、少しでも子どもたちの読書環境が良くなる方向で考えていきたい。委員長が言われたように、単価や冊数を変えれば、十分1人1冊の予算に近づくとする。

先生方の負担が増えるという話があったが、あくまでも主役は子どもたちなので、子どもたちが本を手に取りやすい環境で日々を送れるということが大事。特に1年生というのは、その後の読書に対する意欲に影響すると思うので、学級文庫に新しい35冊なり30冊なりが置かれていると、そこから子どもたちの芽が出てくるのでは、読書に繋がっていくのではないか。

活用方法とか1年後どうするかというのは、1年検討する期間が延びたということなので、十分に考える時間があると思う。お楽しみ袋にして、期待に沿わないものをもらう子がいても、35冊全部読んでいると思うので、私はこれだったと思ってもらえるのではないか。

それから、読書ノートがブックスタートの際に配られるということだが、サードブックに関しても、何か読書ノートや読書リストのようなものがあると子どもたちが競って読み合え、学校でのメリットだと思うので、そういうものを活用したり、読書案内人の手も借りながら選書していくことができれば良い。

F委員：先ほど児童センターの話が出たが、児童センターでは団体図書を利用して、本を入れ替えている。そのほか、地域からいただいた本を置いているが、私が小さい頃読んだ本まで置いてあり、たくさん本が読める環境がある。一番喜んでいるのは低学年の子で、団体図書で新しい本が入ると最初にそこに行く。本がたくさんあるということは、本当に幸せなことだと感じている。家にも本はあると思うが、どちらかと言うとお母さんが選んできた本が多いと思う。子どもたちが、自分ではなかなか手に取らないような、社会や理科の本もある環境に子どもたちを置いていただけるのは嬉しい。

予算の関係は今まで色々な話があったので、皆で意見を出し合って考えていけば、予算を抑えられるのではないかと思う。

G委員：市の方に実施計画を上げる際に通らなかったということだが、事業目的が担当者に響くかが大事。学校の規模に合わせ、運用方法について細かく考えてはどうか。また、中央図書館だけで課題は解決できないと思うが、学校側の協力はどうなっているか。

委員長：作業部会の際、学校の先生にも来ていただいて、学級文庫に設置する案について意見をいただいた。ある程度方針が決まった段階で作業部会を改めて開き、学校側の意見を聞きながら進めていきたい。昨年度来話してきたのは、先生方に負担がないこと、それから、図書館の先生方にも負担をかけずにやれる方法を考えるということで進んできたが、相互理解が得られれば、いろんな方法が広がっていくと思うので、それも含めて今後検討していく。皆様の思いや良い案などあれば、後日でも構わないので図書館に委員の立場として意見を賜りたい。また、本日の意見を踏まえて次に向けて図書館の方でも検討を重ねていただきたい。

**【協議事項2 子ども読書推進サポーターの承認について】**

事務局：説明

委員長：これまでに登録申請されて、承認の上、5名の方が活動している。ブックスタート事業の補助等に、サポーターとして月に1回程度参加している。加えてこの3名が今回新たに登録要件を満たしたので、承認ということで良いか。

《子ども読書推進サポーターについて承認》

**【協議事項3 ボランティア養成講座・スキルアップ講座の開催について】**

事務局：説明

委員長：明日から開催予定だったボランティア養成講座は、県の方針を受けて、9月12日まで自粛延長ということで、9月15日スタートになったと聞いている。また、スキルアップ講座についても、定員を含め、今後予定が変わってくるかもしれないが、現状このとおり計画されている。

スキルアップ講座については、ボランティア養成講座を受講有無に関わらず、広く市民の方に呼びかけて、どなたでも受講していただけるということなので、皆様も関心を寄せていただきたい。

**【協議事項4 中高生向けの働きかけについて】**

事務局：説明

委員長：皆様の手元に「TEEN'S BOOK」という冊子があると思うが、新しい委員もいるので説明すると、昨年度図書館の職員とともに読書案内人が作業部会を行い、最終案を絞り込んで、松本で初めてこのようなリストを作った。これを何度か積み重ねていって、最終的にもう少しまとまったものにしようというのが、現状動き始めたところである。

ブックリスト以外の取り組みについては、図書館の方でも様々な意見が出ており、この秋の読書週間に、中央図書館で、近隣の小中学校の皆さんに本の紹介ポップを作ってください、ロビー展示すると聞いている。

ブックリストについても、次のブックリスト作成のためのアンケートも行われるということなので、質問や意見等があればお願いしたい。

B委員：私も読書案内人として加わったが、中高生だが高校生よりの少し難しいものを入れた。図書館の職員が紹介文を考えてくださったが、すごく丁寧に書いていて良いと思う。子どもたちもちゃんとアンケートに答えてくれていて、コロナでなければ、高校生の意見も聞きたい。これからもブックリストの取り組みを続けてほしい。

委員長：図書館の皆さんと、我々読書案内人が一緒に選書作業をすることができたということが、まず第1歩で、そこに中学校司書の先生も加わっていただけた。コロナでなければ、実際に中高生に加わってもらうようなことが進んでいく足がかりになればいいと思う。このブックリストを2度3度繰り返して、厚みのあるリストを作っていきたい。ポップの展示も注目していただき、ぜひ図書館に足を運んで実際に見てほしい。

【その他 松本市読書案内人運用方針について】

事務局：説明

委員長：例えば今年度のスキルアップ講座を団体で1講座持つ場合には例外となると思うが、謝礼について、原則として1講座から1講師あたりに基準を改めるということが良いか。

《松本市読書案内人運用方針について承認》

委員長：この2次計画ができ、この委員会もできて、我々、委員会の委員だけでなく、読書案内人とされる方を必要に応じて招集し、作業部会に参加いただいたり、意見を聞くことができるようになった。そして一緒に子ども読書推進に当たれるようになった。

また、あわせて、学校との連携、児童センターや公民館を含め、学校以外の場所との連携も進めているところだが、多くの子どもに関わる人たちが手を携えて、ともに子どもの読書推進に当たっていけるような未来を、皆様にご意見をいただきながらつくっていききたいと思うので、今後も引き続きお願いしたい。また、作業部会等への参加をお願いした際は、ぜひご協力いただければと思う。

以上